

《シリーズ ケアをひらく》
『技法以前 べてるの家のつくりかた』
「当事者」不在の援助は
本当の課題を解決し得ない
ケアの本質に迫るドキュメント

著：向谷地生良／定価 2,100 円(本体 2,000 円＋税 5%)
発行：医学書院／TEL：03-3817-5657



●回復を促す援助者の雰囲気・資質がある

「当事者自身が“自分を助けること”を助ける」——私は看護師時代を振り返り、その理念を納得するだけで、ケアできていたつもりになっていたのかもしれないと切に感じた。

治療の主役は患者自身であり、看護師の役割はその支援であるという考え方に異論は少ないと思う。今まで患者自身の治る力を支援するためにさまざまな看護技術が開発されてきた。しかしながら、その通りに実践してみてもなぜか成果があらがらない。同じことをやっているはずなのに、なぜかあの人がケアすると患者が変わる、ということを経験したことはないだろうか。言葉で表現するのは難しいが、患者が自信を取り戻し、回復を促すための援助者の雰囲気、資質のようなものがある。著者はそれが何であるかを考えさせてくれる。

本書では、著者がソーシャルワーカーとして精神障害等のかかえる当事者の方々に援助された具体的な事例や場面を紹介してくれている。読むことを通して著者が当事者に関わっている様子が頭に浮かんでくる。私は精神領域には疎いが、エピソードを拝見すると、どの事例も対応に頭を悩ませるものばかりだと思う。しかし、どの事例からも問題に取り組む際の苦労は感じられるが、結果として暗さはない。むしろその場の喜びや楽し

さが伝わってくる。そこには当事者が自分の言葉で自分の体験を語り、自分で考え、自分で行動しようとする姿がある。

●人間本来の治る力を信じる

ある当事者は、コンピュータゲームの中から「きみは全米プロバスケットリーグにスカウトされたよ!」と誘われているので、荷物を持って空港で保護されることを繰り返していた。著者は前向きに話題に乗り「採用が決まったのはすごい!」と声をかける。そこで返ってきた言葉は「本当は自信がないのと、飛行機の乗り方もわからないので行きたくないんです!」であった。その後、著者は一緒に断り方を考え、当事者は見事に断ることができたのである。このエピソードには続きがあるのだが、最も笑ってしまったところなので、ここでの紹介は控えさせていただきたい。

本書を通して、誰しもが持っている人間本来の病気を治す力の強大さ、そしてわれわれ医療職が、人が治ろうとする過程に携われることの素晴らしさをあらためて認識することができた。

私は大学で教鞭を振るわせてもらっているが、教育現場に置き換えると、学生が当事者、教員は援助者であろう。援助者としてはまだまだ駆け出しである。著者がワーカーとなる卒業生に現場の心構えとして「形から入れ」と声をかけたように、早速、形から入ってみたいと思う。